

研 究 会 レ ポ ー ト



中嶋嶺雄氏の紹介

東京大学大学院修了。社会学博士。東京外国語大学教授（国際関係論、現代中国学、アジア地域研究）。

現在——東京外国語大学学長。「アジア・オープン・フォーラム」日本側世話人代表。

著書——『現代中国論』、『香港 移りゆく都市国家』、『中国の悲劇』、『香港帰郷』、『北京烈烈』他多数。

李登輝時代とは何か

中嶋
嶺雄

倉田理事長 李登輝閣下は、三期十二年、この五月十九日をもって任期を満了されるわけでございますけれども、その李登輝閣下の果たされた足跡とは、いったい何であつたのか。まさにこの問題につきましても、論ずる方而言へば中嶋先生をおいてほかにはいらつしやらないと思われまふ。先生のお時間の許す限りお時間をいただいで、ご講演いただき、あと若干のご質疑をいただいでまいりたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます（拍手）。

中嶋 それではよろしくお願ひいたします。マスコミ総合研究所は藤田さん亡きあとも引き続きご発展で、その藤田さんの遺志を継いで倉田先生がおやりになつておられまして、私も大変喜んでおります。

そういう次第で今日は台湾の問題には非常にお詳しい皆様にご出席でございますが、本日のテーマに従ひまして私なりの見方を率直にお話しし、李登輝時代を取り急いで総括をしてみたいと思ひます。

その前に今回の総統選挙について私なりの感想を申し上げますと、結果的にはこれでよかつたのではないかと思つております。おそらく李登輝総統も心の底で

羅福全駐日代表略歴

1935年、台湾嘉義市生まれ。65歳。

●学 歴

- 1958年 国立台湾大学経済系卒業
第7期予備軍官訓練班卒 海軍少尉（兵役）
- 1963年 早稲田大学政治経済研究所卒経済学修士
- 1965年 米国ペンシルバニア大学M A
- 1968年 米国ペンシルバニア大学Ph. D

●職 歴

- 1973～80年 国連地域開発センター、国際比較研究主任
- 1980～82年 ハワイEast West Center 上級研究員
- 1981～82年 ハワイ大学経済学部・地理学部兼任教授
- 1982～83年 ニュージャージー州立大学客員教授
- 1982～84年 ペンシルバニア大学ビジティングスカラー・兼任教授
- 1985～89年 アジア太平洋開発センター、国際貿易および経済合作研究主任
- 1990～95年 国連大学学術審議官
- 1995～2000年4月30日 首席学術審議官
- 2000年4月30日 国連大学高等研究所副所長退官
- 2000年5月30日 駐日代表着任

●委員会および顧問

- 1986～90年 アジア太平洋経済協力会議、国際機構代表
- 1985～90年 A P D Cアジア太平洋経済展望フォーラムチェアパースン
- 1979～83年 世界地理学第三世界年委員会委員
- 1990～94年 先進7カ国経済サミット経済学者提案委員会委員
- 1994～95年 国連開発機構ラウンドテーブル会議委員
- 1996～97年 Human Development Report 評議委員
- 1995年 Inter Action Council（OBサミット）報告書ハイレベル委員会委員
- ユネスコ「世界文化報告」起草委員会委員

・下記国際組織、研究機構の委員および顧問を歴任

世界銀行、国連開発計画、国連人口基金、国連人間居住センター、米国環境保護機関、日本政府経済企画庁経済研究所、インドネシア政府、イラン政府、韓国政府、タイ政府、マレーシア政府、フィリピン政府などの開発機構。

華僑の皆さまは両国の懸け橋として、日本と台湾の関係を非常に滑らかなものにして来られました。ここにまず、私は陳水扁総統に代わり、すべての華僑の皆さまに厚く御礼申し上げます。同時に、在日華僑の皆さまが引き続き政府の進める対日関係の強化を支持されることを呼びかけるとともに、特にこの場をお借り

し、華僑の皆さまによりしくご協力下さいますようお願い申し上げる次第であります。私は常に学習する精神により、各方面と相互信頼関係を打ち立て、わが国と日本との関係をいっそう深遠なものとし、相互協力関係を強化して参りたいと思っております。

皆さまのご支援、ご鞭撻をお願いする次第であります。ありがとうございます。

はそのように感じておられることは間違いないと思うのですが、選択肢としましては、李登輝總統の十二年間、これから申し上げますように民主化、あるいは台湾化という二つの大きな仕事に取り組んできたわけですから、この成果を台無しにすることのないようにということが、李登輝總統の最大の念願であつたわけで、それを結果的に考えますと、民進党の陳水扁さんが継承していく、あるいは継承せざるを得ないというふうに全体の大きな流れができてきたことは、一つの大きな歴史の流れとしてはよかつたのではないかと私は思います。

仮に国民党の候補である連戦さんが――選挙結果はだいたい票数が開きましたから、とても無理だつたのですが――李登輝總統のあとを継承できるのかということと考えますと、この選挙戦の最終段階を見ていると、とてもこれは李登輝さんの継承者ではないと言わざるを得ない問題がいろいろ出てきました。

日本の一部の新聞には、連戦さんはお父さんがご承知のように言わば著名な抗日運動家としても知られたわけで、蒋介石政権のもとに馳せ参じて、連戦、連勝というまさに抗日運動の中から出てきた

人なのですが、弟さんが連勝だということとを日本の新聞にも出ていたところがあります。ただど倉田先生の『連戦』という本を読むと、とても正確に書かれていて、もしも連戦さんの弟が生まれたらという想定の下でということを書きちんと書いてありまして、実際に生まれたら連戦、連勝だつたと思うのですが、弟さんは生まれなかつたのです。一人息子だと思ひます。そのかわり連戦さんには四人の子どもがいるのですが、息子二人には連勝文、つまり連戦・連勝の本来おじいさんが付けるべき名前が、息子に付けているのです。それからもう一人は連勝武です。まさに文武なのです。

そういうことになると日本にとつても連戦さんは、親目的にはなりにくい出自です。そこが李登輝總統と完全に違うのですが、まさに日本人として育ち、日本の教育なり文化を非常に敬愛する李登輝さん、それが連戦さんの場合、まさに抗日運動を背負つて生い立ったわけですから、その点でも李登輝路線とは、実は大きな断絶があつたと思うのです。

特に選挙の最終段階で、蒋介石夫人の宋美齡女史の権威に最後にすがりつこう

としたあたりは、李登輝總統とは決定的に違います。百一歳で在命、まだご健在ではあるのですが、連戦さんは宋美齡夫人の支持書簡を発表した。これなんかも李登輝總統は苦々しく思っていました。実はこれは總統が直接私に話されたことなのですが、もともと蒋介石さんは浙江語です。つまり政務委員として最初に蒋介石と会つたときのことです。李登輝總統がちょうどニュージージランドに出張中、クライストチャーチで行政院長の蔣経国さんに引き抜かれて政務委員に迎えられる帰国する。帰国便がなくて組閣にはちよつと遅れるのですが、そこで蒋介石總統に会つたとき、蒋介石さんの話す言葉は、浙江語なので、李登輝總統は全くわからなかつたそうです。浙江語はなまりが非常に強い。それから今度は宋美齡女史の話す言葉は上海語ですから、やはり李登輝さんはよくわからないのです。

それでこれも一部にちよつと誤つて伝えられていますけれども、一九九〇年代の初頭のことです。つまり李登輝さんが八八年の一月に總統に就任されて、そのころというのは本当に李登輝總統の周りには陣が、国民党の古参幹部が取り巻いていたわけです。まさにその包囲網の中に

本省人としての李登輝さんが副総統から総統に就任した。当時は李煥さんとか愈国華さんとか、郝柏村さんとか、みんな行政院長であつたり、国民党の秘書長であつたり、そういう古参の幹部が取り囲んでいる中、そういう中で、大変なことがあつた。これを九三年と書いている方もいますけど、実は九一年のことです。このときに郝柏村さんが軍の力によって、なかなか参謀総長の席を退かなかつた。李登輝さんは、シビリアンコントロールを貫徹させるために、郝柏村さんを国防部長に移すことにした。それによって、軍が政治を決めるという体質を改めることに成功したのですが、これも本当にぎりぎりの瀬戸際でした。そしてある種の「暁の軍事クーデター」を未然に防止するということがあつたのです。これが李登輝さんのリーダーシップがかなり強くなつていく一つのきっかけなのです。そのあとまだいろいろあります。ただどこそのころも郝柏村さんは、宋美齡の威光を利用しようとしたことがあるわけです。何かあると、蒋家一族の影響で李登輝さんを圧迫したのですが、そのときも李登輝さんはなかなか知恵を絞りまして、宋美齡さんの話す上海語が聞

き取れないということを理由に、「あなたの要求を紙に書いてください。書けば、わかります」と。そういうようなことをされて蒋家一族の圧力をはね返したことがあることを私は伺っています。

ということとは、そこまでして知恵を絞らないと、なかなか一口に民主化と言っても、制度を単に変えるわけではなくて、まさにそういう独裁体質を変えていくという大きな事業というか、大きな闘争だつたと思うのです。ですからそういう形で宋美齡さんの政治介入を防いだわけです。

だけど今度は連戦さんが、こともあろうに総統戦の最後の段階で、宋美齡さんの書簡を示すことによって支持を得ようとしたというのは、まさに李登輝さんからすれば何をやってくれるか、ということだと思ふのです。

それから三月十八日の選挙、二十四日に李登輝総統が国民党の主席を辞任されるまでの経緯の中でもいろいろあつたわけでありまして、これらを含めて考えると、総統としては非常に深いジレンマをかみしめながら、しかし最後にはこれでよかったという形で、いま李登輝総統は非常に清々しい気持ちでいらつしやると

思います。

一方、宋楚瑜さんは、今回思わぬ善戦をしたわけです。宋楚瑜現象というようなものがある種起こりまして、どうして宋楚瑜さんが国民党を離れたにもかかわらず、あそこまで票を伸ばしたのかというところが、まだ十分解明されていないと思うのです。私もお会いしたことがありますが、彼はある意味ではポピュラリティがある政治家です。連戦さんに比べたら、はるかに人を引き付けるようなところがあります。何といつても長い間国民党の秘書長、つまり幹事長をやり、そして台湾省主席をやりという人ですから、その過程で決定的にある種の利権構造に一番近いところにいる政治家なのです。言ってみれば、田中角栄タイプの政治家と見ていいと思います。

李登輝さんは、国民党の党営事業を何とか民営化しようとした。あの党営事業というものを、庶民に返す。これをずっと考えてきたけど、なかなかできない。これはまさに既得権の固まりなのです。国民党の中央だけではなくて、地方に行つてもますます既得権、そういうところに宋楚瑜さんはバツチリとはまつたわけ

でありまして、これは学者総統として出てきた李登輝さんとは、だいぶ基盤が違ふ。そこにおいて、一つの大きな問題があったわけです。そのことが逆に、宋楚瑜さんが票を予想よりも多く獲得することになった一番の大きな原因だと思ひます。

しかし宋楚瑜さんは、ご承知のように、李登輝さんにしてみればあとを継いでもらったら一番困る外省人であります。そういう選択肢だったわけです。そうするとやっぱり陳水扁さんが勝利を得たということは、ある意味で自然の成り行きでもあります。李登輝時代を継承する候補はどれかということを考えてみると、それがたとえ野党であっても、民進党であっても、李登輝総統にとつては結果的に満足すべき選択になつていっていると思ひます。

つまりこう思ふのです。李登輝さんを支持した、李登輝さんがここまでやってくれたことへの支持の票が、陳水扁さんのところに流れていったわけです。もちろん民進党だけの基礎票もあるかもしれませんが、それだけでは勝てなかつた。これに李登輝さんの進めてきた改革路線

を何とかこのまま繋いでいく候補者ということとで、陳水扁さんが勝利したということは疑ひもないところであります。

例えばアカデミア・シニカ（中央研究院）の李遠哲院長、ノーベル化学賞受賞者であるこの方は、確かに李登輝さんとも非常に近い関係の方ですが、この方が終盤、陳水扁陣営支持に回つたわけですから、これは李登輝さんを裏切つて、陳水扁支持に回つたのではないのです。むしろ李登輝さんの理解を得て陳水扁支持に回っている。

彼のもとにはもう一人マイケル・シャオとして知られる若手の蕭新煌氏もいます。この間NHKのテレビが陳水扁勝利のドキュメントのテレビをやるときに、蕭新煌さんのことを随分長く紹介していました。彼は気鋭の社会学者であります。

民族学研究所も主宰したりして、中央研究院の中で非常に新進気鋭の、と言つても四十代で私も個人的にもよく知っていますし、わが家にも来たことがあるのですが、彼なんかも李遠哲さんとともに一生懸命陳水扁さんを支持して、そのことがNHKのテレビの取材の対象になつていることにも明らかなのですが、彼なんかを見ていますと、やはり同じパターン

だと思ひます。

それから皆さんよくご承知の、この間私どもの「アジア・オープン・フォーラム」を台南でやつたときに、台南で一生懸命お世話いただいたABC樹脂の世界的なメーカーである奇美実業の許文龍さんですが、この方は皆さんご承知のように台湾独立派を支援してきました。だけど最後までずつと、李登輝ファンでした。彼も李登輝陣営を離れて陳水扁陣営に行つたのではなくて、まさに李登輝さんの許しを得て、あるいは李登輝さんにいろいろ最後の、むしろ連戦氏には要注意だということも含めて、李登輝さんに書簡をしたためながら陳水扁を支持しているわけですから、そういうことを考えましても、私の言つたような流れというのは、一つの方角性だったと思ひます。

そうした状況の中で李登輝総統は、結局最後の三月二十四日の党主席辞任の決断をされた。これを台湾の新聞なんかは表面的には反李登輝デモが起つていたからだと言つていたのですが、決してそんなことによるものではないのです。反李登輝デモはたしかに起こつたけど、これはだいたい外省人の人たちで、主とし

て宋楚瑜さんを支援した外省人の人たちが、国民党の反主流派というか、反李登輝派なのですが、党主席辞任の理由はそんなことではなくて、李登輝総統自身が国民党的体質に自ら決別することだっただけだと思います。そして国民党そのものが、もう今までのように選挙の集票マシンとしても役に立たない。あるいはもう時代の任務を完了したという認識があったからだと思います。これは総統として、また国民党の主席でいながら、実に大きな決断ではなかったかと私は思います。

というのは、考えてみると今回の政権交代というのは、中国の歴史でも非常に画期的なことだと言わざるを得ないのでありますが、とにかく李登輝総統の考え方からすると、国民党というのは「以党治国」、党をもって国を治める」、国と党とどっちが大事かということをはとんど理解しないで、国民党イコール国であるという体質で来た。だから「以党治国」なのです。それが当たり前のことである、とされてきた。だから党営事業というの、当然である。一種の国営事業を党が握ってきた。しかし自分が主席を離れることによって、国民党イコール国であるという体制から決別しようとした。国のほう

が上であつて、国があつて初めて党があるのに、党イコール国であるかのような体制から自ら決別したというところに、今回の非常に大きな意味があつたと思うのであります。

そうしますと蒋介石・蔣経国時代から台湾のファンである方には、李登輝さんの今回の決断自体にもある意味では矛盾というか抵抗を感じられる方もきつとあるかと思いますが。ただここが李登輝時代の一つの特徴なのです。つまり李登輝は、国民党の主席でありながら国民党と戦い、あるいは国民党の旧体制と戦い、中華民国の総統でありながら中華民国と戦つてここまで来た人だと思えます。

ですから李登輝さんが一番嫌いな言葉は、「中華」という言葉です。中華思想がある限り、中華というものがある限り台湾も中国もよくならない。それを打ち壊さなければ本当の近代化はできないということですから。ですから総統の十二年間の間に「新中原」というスローガンを出されたのも、中華ではない、あの春秋戦国の文化が爛熟し、非常に自由闊達な雰囲気、これは今の大陸にはない。中華思想を掲げる限りだめだ。新しい生き活きた文化の中心は台湾にある、という形

で、新しい中原を作ろうというスローガンを出されたのも、真意はそこにあつたと私は思うのであります。

それほどまでに台湾の民主化は困難な課題でした。民主化と言うと何か選挙制度をいじくったり、あるいは組織を変えたりということに思われますが、台湾の場合はそれだけではとどまらない問題があつた。いわゆる憲政改革、これ自体も大変なことだったけど、それにとどまらない困難さを伴ったのが、台湾の民主化でした。さつき申しましたように、民主化と言っても蔣家一族という蒋介石、蔣経国、それから総統就任のころはまだ蔣緯国さんもいましたし、宋美齡さんもいた。こういう蔣ファミリーの影響力をどういうふうには排除するかということ一つ取つても大変なことであつたわけです。それほどまでに国民党の九十年の歴史というものは、大きく台湾にのし掛かり李登輝さんの前に立ちはだかつていたと言わざるを得ないわけでありまして。

ご案内のように、むしろ私は孫文革命と言つてよいと思いますが、一九一二年の辛亥革命だけではなくて、その前の孫文の何回にわたる挙兵から始まった孫文

革命、この一連の革命以来、名前はときどき中華革命党とかいろいろ変わりましたが、国民党というものが存在してきたわけです。その歴史に言わば幕が下りた、あるいはその歴史がもう終わったことを宣言されたに等しい事態が今回起こったということでもあります。

それから言うまでもなく、指導者の死を待たずしての権力の交代、政権交代が行われたということは、まさに中華世界四千年の歴史始まって以来最初のこととであります。この二つのできごとが、われわれの目の前でこの三月十八日から五月二十日（新総統就任）、やがてそれを過ぎていくと思えますけど、そういう状況の中で事態が起こっているわけです。あの小さな台湾という人口二千二百万の九州ぐらいの大きさの島で起こっていることは、まさに中華世界全体にとっても極めて歴史的な意味を持つわけです。

この二つの事実を挙げただけでも大変なことなのですが、先ほど申し上げましたように台湾における民主化というのは、単なる制度、あるいは組織の変更では済まされない問題を抱えていた。結局、台湾の多くの人たちにとっては、国民党というのは征服王朝だったのです。ですから

らちよつと言い過ぎかもしれませんが、満州族の王朝としての清が、やがて征服王朝として辛亥革命によって打倒された歴史と比較することも、あながち不可能ではないというような意味を持っているような気がいたします。

そしてその征服王朝が、まさに李登輝さんの強調してやまない人民の意思、民意に基づく政治によって、しかも世界中心がみんな見えている前で行われたということとあります。しかもこういうある種の無血革命として事態が進んできたわけですが、それはまさに李登輝時代というものがもたらしたものだということに、ものすごい大きな歴史的意味があると思えます。

そこでもういっぺん少し理論的に言うか、論理的に整理してみますと、李登輝時代の一つの大きな座標軸は、民主化という問題だと思えます。この民主化というのは単に制度の改革だけでは済まされない、外来政権ないしは征服王朝の内面をえぐって、そこを変革するということ、まさに蒋家一族とか国民党の主として外省人の国民党がすべてであるという体質そのものを変えていくという、大変な戦いを、しかも孤立無援の状況の中で李登輝

さんはそれをやることを余儀なくされたわけがあります。

総統の「台湾の主張」にもありますように、李登輝さんは最近では国民党時代を白色テロの時代だと自ら言っていました。それからさつき私が申し上げましたように、外来政権という言葉も自ら使っているのです。これはわれわれから見ると、蒋介石氏の「以德報怨」というイメージがありますし、それから蒋経国時代は治世の晩年において戒嚴令を解除し、李登輝さんへのパイプを開いたという見方もできるのですが、やはりそこに残されたのは李登輝さんの孤立無縁の戦いでして、それを考えますと、李登輝総統が白色テロとか外来政権といわれることは、李登輝さんの立場からすると、よく理解できるわけがあります。

それほどまでに、いわば当時の李登輝さんの包囲網というものは牢固なものがあつた。それを一步一步突き崩していった、李登輝さんの十二年間があつたと思うのです。もしそうしなければ、李登輝政権は途中でダウンしていたと思います。したがってこういう認識からすると、李登輝総統が例の二・二八事件につきましても、この悲惨というものはつきり

と位置付けて、国民党の主席、中華民国の総統として公式にそれを償っておりま
す。

それから今回民進党に馳せ参じること
になった人たち、あるいは地方の県長や
市長など、それから今度は例の総統府諮
政になる、国策顧問ではなくて諮政とい
うのはまさに公職としての顧問ですから、
行政職手当も付くのですが、それになら
れた彭明敏さん、彼は帰国する前に私の
研究室にも来られて、いろいろ私も大変
相談に預らせていただいたのですが、
一時は彭明敏さんといったらとても台湾
に帰るなんていうことは考えられない人
でした。彼のアメリカへ亡命したときの
いきさつその他を考えますと……。その
人がなんと、中華民国総統府の諮政とし
て今回任命されるなんていうことは、ま
さに歴史の大きな百八十度の転換です。
彭氏の帰国について李登輝総統が、非常
に配慮していました。

それから日本で台湾独立連盟とか、後
に建国党とかいろいろ私の大学院時代の
同窓である黄昭堂さんにせよ、あるいは
許世楷さんにせよ、ああいう日本で台湾
独立運動をやっていた人、あるいは金美
齢ご夫妻なんかもそうかもしれませぬ、

そういう人たちについても、李登輝総統
は本当に小まめに、一つ一つ気を使って、
それらの人たちの動静についてもいつも
気に掛けていましたし、それらの人たちが
帰国できるための措置についても、い
ろいろ指示されたわけです。

そういうことが台湾の民主化の過程な
のであって、単に政治制度を変えるだけ
では済まされない問題があったのであり
ます。つまり在米や在日の、つまり白色
テロの時代の帰国できなかった人たちを
迎え入れるために、実に細かな気配りも
されていたのが李登輝総統でありますし、
非常に細かいところまで気を使って一つ
一つ処理をされてきたわけです。ここに
も台湾における民主化というものの一つ
の断面が現れていると思います。

この民主化というものを横座標とする
と、もう一つの大きな座標軸は、これも
言うまでもないことなのですが、台湾化
だと思います。この台湾化という問題を、
私はアイデンティティーの深まりと解釈
しているわけであります。アイデンティ
ティーという言葉には、なかなかいい日
本語訳がございません。そこであえて日
本語に訳するとすると、「存在証明」とか

「自己同一化」とか訳すしかない
言葉がないと思うのですが、これは台
湾の国語には非常に適当な言葉がありま
す。そのことを私は「朝日新聞」に最近
書きました（台湾・李登輝総統の十二
年間）五月十一日夕刊「文化欄」が、
「朝日新聞」も台湾についての報道はだ
いぶ変わってきました。ですからそれも
今の台湾を無視できなくなったことだと
思うのです。

例えば皆さんは気付いていないかもし
れませんが、朝日新聞に「論座」
という雑誌があります。割合に最近面白
い、大学問題も随分特集しています。こ
の「論座」に、李登輝さんが「Foreign
Affairs」に書かれた論文が翻訳掲載さ
れているのですが、日本語のタイトルは
「台湾は主権国家である」という論文で
す。その肩書きが「中華民国総統」と書
いてあるのです。これは朝日新聞にとっ
て、画期的なことですよ。「中華民国」と
いう言葉をそのまま、今までは固有名詞
でも使いませんでしたから。

私がこの間、朝日新聞に李登輝時代の
総括を書いたときには、括弧をつけられ
ましたけど、それでも「中華民国」とい
う言葉を使った。日本のマスコミ、これ

はおそらく「産経新聞」でさえも、「中華民国」という言葉はなかなか使えません。一番困るのは、台湾の中国語、北京語のことを、「国語（クオユイ）」と言います。そうするとこれは社のトップではなくて、つまり些末なところで校閲の人が、「国語」というと、これは国ということになってしまふから困ると言う。国語というのは一般名詞ですよ。私は「台湾の国語」と言いたいのですが、国語というと台湾を国とみなすから困ると言う。そういう限界は、まだ日本のマスコミには残っています。だけど従来よりは随分よくなったし、この間同じ「朝日新聞」にニューヨーク市立大学の霍見芳浩教授の「李登輝さんの来日を日本が拒否したら、日本の外交の将来はない」というようなコラムが出るようになりました。これも皆さんの努力のおかげだと思います。随分日本のマスコミも、台湾問題については変わってきました。

十二年前、李登輝さんが総統に就任したところ、私が「アジア・オープン・フォーラム」を組織したころなんか比べると、本当に大きく変わってきたと思います。それほど台湾の存在は大きくなったということだと思います。

そこで台湾の国語、あえて「国語」と言いますが、台湾の場合に普通は閩南語、俗に言う福建語、台湾語を使っているわけでありますから、今回の選挙でもみんな候補者はさっきのアイデンティティーというところから、宋楚瑜さんであつても北京語よりも福建語というか閩南語を使ったのです。福州の閩江の北を閩北、南を閩南といいます。あそこは大きな川があつてさへぎられたために、文化も言葉も違つてしまつたのです。だいたい台湾の人たちの祖先は、閩南です。閩江の南からずつと泉州とかアモイ（廈門）にかけてのあたりから台湾に移ってきた人たちです。

その台湾の国語には、アイデンティティーの訳語として「認同（レントン）」という言葉がある。これは日本でも「アイデンティティー」という言葉が人口に必ずしも膾炙していないので、台湾の人でも一般の人はあまり使わないかもしれませんが、この「認同台湾」という言葉は台湾をアイデンティファイするということとです。ですからこれは動詞なのですが、今度は「台湾認同」という言葉があります。これは李登輝さん自身が使っています。これは名詞で、「台湾アイデンティ



熱心に聞き入る聴衆

「アイデンティティ」となります。非常にいい言葉なのです。同じ、自分たちが同一性を持っているということ認識する。同一性の認識ということです。それを「認同」という言葉で表現するのであります。

中国大陸では、まだこの「認同」という言葉が辞書にも出ていませんし、一般にもほとんど使われていません。ですから中国でアイデンティティという言葉を使つた場合には、「自我認識」とかそういうような言葉を使つて何とか当てていきますけれども、台湾にはまさに「認同」という非常にいい言葉があるのです。

この台湾のアイデンティティというのは、この李登輝時代にまさに非常に明確な形で確立したと言つていいのではないのでしょうか。李登輝総統自身によると、台湾の人たちが初めて自分たちのアイデンティティというのを持ち始めたのは、日本の統治下である。日本に教育され、日本の教育を受け、日本の文化を吸収する中で、それまではほとんど台湾というの「化外の民」として域外の、全く中国大陸から無視された存在であつたものが、教育を受け、そして自分たちの自意識というものを確立してくる。やはり教育とか文化というものがないとだ

めですから。それとともにアイデンティティができてきたと言われますし、私もそうだと思います。

だけれどそれが、やがて日本の統治下から離れて、再び国民党の外来政権、征服王朝が中華を押しつけていたわけですから、そこでは台湾人としてのアイデンティティは深まりませんでした。それをまさに李登輝さんが、非常に明確に「自分たちは新しい台湾人である」として位置づけ、自分たちはみんな新しい台湾人としてやっていこうじゃないかという誇り、自信というものを与えたと思うのです。これは非常に強いものがあります。

司馬遼太郎さんが「街道をゆく」の最後にたどり着いたのが、台湾の発見、あるいは台湾人との出会い、中でも李登輝総統との出会いでした。司馬遼太郎さんは、ご案内のように若いころはモンゴルに夢をかけ、大阪外語でモンゴル語を学んだ方です。そして壮年の時代は大陸中国に夢をかけ、一時は日中友好派と言うか、そういう立場からしよっちゅう中国を訪れ昔の西域とか訪れたり、辺境を訪れたりしていました。司馬遼太郎さんが書かれた本の中に「長安から北京へ」と

いう中央公論社から出ているエッセイ集がありますが、当時は文化大革命や毛沢東中国にかなり共感を寄せていました。お名前を出して恐縮ですが、陳舜臣さんも司馬さんの同窓生で仲がよろしいお二人だったと思いますけど、陳舜臣さんも大阪外語のヒンディー語ですよね。陳舜臣さんも最近台湾に回帰されていますけど、一時はむしろかなり共産中国に親近感を持っていた方だと思うのです。

その司馬さんが、最後に台湾に行つて、「街道をゆく」で探し求めた、街道の果てにあったのが、台湾人の心だったので。ここに出会つて、むしろ日本が失っているものが、「街道をゆく」で求め続けていたものが、台湾に生きていたということに司馬さんの最晩年の到達点があった。「街道をゆく」「台湾紀行」はこれでも朝日新聞社刊ですけども、「朝日新聞」がすべて悪いわけではないので、ぜひ読んでいない方は是非読んで下さい。皆さんは、もちろんお読みになつていらっしゃると思います。

その中に李登輝さんとの対談があつて、「台湾人に生まれた悲哀」と言う李登輝さんの言葉を司馬遼太郎さんが引き出しています。それを去年のPHP研究所か

ら出た『台湾の主張』の中では、今度は「台湾人に生まれた幸福」と李総統が言っているであります。単に初めから幸福であれば、その「幸福」という言葉にあまり意味はないと思うのです。まさに台湾人に生まれた悲哀、これを言わば経験してこそ、この十二年間の台湾の人たちが得たのびのびとしたアイデンティティーというか、自意識というものがあるわけでありまして、それをもたらしただけはまさに李登輝総統だと思います。

そういう一種の自己否定の契機を経ているがゆえに、「台湾人に生まれた幸福」をもっとわれわれは大事にしようじゃないかというのが、李登輝さんの『台湾の主張』の一つの骨格になっています。そしてそのことをもっと主張しようじゃないかということになっているのであります。したがってこの李登輝総統の言われた「台湾人に生まれた幸福」が、まさに台湾人としてのアイデンティティーによって初めて裏付けられているということなのです。

しかも今日の冷戦後の世界を見ると、単なるアイデンティティーを強調すると、しばしばそれは地域エゴイズムになったり、偏狭なナショナリズムになったり、

あるいは地域紛争のものになったりします。チェチェンにしろ、ティモールにせよ、コソボにせよ、みんな冷戦構造が崩れて、それぞれの民族が自意識を持ち始めた。だけど台湾の場合、全く違うわけです。そこにまさに民主化というものが伴っているということが、重要だと思います。ですから民主化を伴わないアイデンティティーの強調がしばしば民族紛争の原因になるのに対して、台湾の場合にはそうではないということです。

それからさっきのいわば「台湾人に生まれた悲哀」から、「台湾人に生まれた幸福」という大きな内面的な転換を契機にしているからこそ、台湾人のアイデンティティーは強いのだと思います。

このところをわれわれが理解しない限り、台湾問題についての理解は十分なものにはならないと思うのです。つまり民主化という横座標とアイデンティティーという縦座標、これによって台湾問題がいま持っている意味というものを理解することができると。

ただ私はそれだけではまだ不十分で、もう一つの座標軸が必要になるのではないか。それはまさに李登輝さんその人が

示したステーツマンシップと政治的なリーダーシップだと思っています。これは皆さんが感じているように、日本の政治家に李登輝さんほどのステーツマンシップとリーダーシップを持った人がいるだろうか。ステーツマンシップとリーダーシップを保持するためには、単に決断力ばかりか、なんといつても学識がなければいけない。そして哲学がなければいけない。理念がなければいけないのです。

この学識ということにおいて、李登輝さんの右に出る政治家はいないと思います。李登輝さんの学識は、もちろん日本の旧制台北高校時代の彼の受けた教養もありますし、戦時中とはいえ京都大学の農林経済に学んだときの学問もありますけれども、何といつても彼の読書によるものです。李登輝さんの読書量のすごさというのは、本当に敬服に値します。ですから日本のものを、それも大部分が日本のものである岩波文庫やなんかがたくさんあるのもそうなのです。李登輝さんのところへ行くと、新渡戸稲造の『武士道』なんかを、むしろ李登輝さんから勧められるぐらい、それほど日本のものも読んでいらっしゃる。そういう読書量です。

これは本当にあれだけの読書をいつも夜遅くまでやっている。台湾の大地震が起きたときも、夜起きていて、本を読んでいた。あれが李登輝さん。一日なのですね。私も学長なんかやっている。日中はいろいろなことがあります。しかし夜は自分の時間として少しでも机に向かっている。

多くの政治家のように夜宴会をやって寝てしまうのではなくて、李登輝さんは、ちゃんと机に向かって本を読む時間を取っているのです。日本の雑誌にも本当によく目を通している。例えば「エコノミスト」で私がやった書評なんかにまで目を通していますし、そこまでの読書量というのは大変なものだと思います。

これが、李登輝さんのステーツマンシップというものを支えていたのではない。ですから敬虔なクリスチャンであり、すぐれた農業経済学者である李登輝さんが、まさに世界の学者と渡り合って一歩も引かなかった。レスター・サローと多くの世界有数の学者と堂々と渡り合えるような人であったということが言えるような気がします。

ですから彼はいわば人生論、特に最近教育問題、心霊改革と言いまして、精

神革命と言うのでしょうか。そういう問題とか、それから文明論、それにももちろん自分自身の専門である経済政策、特に最近WTOの問題とか、いまアジアにはアジアマネーが必要になってくるのではないとか、いろいろな問題を含めて語っていた。そして台湾の場合、大地震の影響をほとんど吸収しまして、今年も経済成長率はほとんど落ちなくて、うまくいくと六・二%ぐらいいくのではないかと思います。六%台に乗せることは確実でしょう。

ですからそういうことを含めて、お得意の経済政策についても総統自身は、お役人の作った作文をそのまま読むということをはほとんどしなす。セレモニーのときの作文は、式辞とかそういうのは別だけど、重要なスピーチはみんな自分で手を加えておやりになります。そこに、いつも官僚の作った作文を棒読みする政治家と違う李登輝さんの大きな特色があります。

したがって李登輝時代というか、この十二年間の台湾は、非常に知的な環境にもあったということです。そのような知的な状況たり得たというところに、今までのほかの政治家にない、つまり蒋介石

時代、蔣経国時代は、権威の時代であったかもしれない。カリスマ性はあったかもしれない。李登輝さんの場合は、カリスマというよりも、むしろステーツマンシップとしてのオーラがあるようなところはありますけれども、ただ一方で非常にざつぱらに細かいことまでしゃべるし、そういう人間味のある政治家です。しかもそれが非常に知的である。

ここに言わば大きな特色があるような気がいたします。しかもこのような歴史的な時代を、中国からの絶え間ない圧力、そして外交的な孤立した空間の中で達成したということは、まさに偉大なことではないかと思うのです。単に普通の状態の中でやったのではない。何か言えば、大陸中国はちょうどこの十年間、まあ十二年間ですけれども、ちょうど中国は天安門事件以来の十年間、江沢民体制の十年間ですが、大陸は政治的には何にも変わっていないのです。民主化だつて全然進んでいませんし、最近ますます多元的な価値を抑えて一つにコントロールしようとしている。

これがまさに大陸中国なのですが、台湾はどうですか。あの民主化のすごい進展、李登輝批判だつて自由に行われるし、

どんどんやっている。ここに大きな違いがあります。マスコミを李登輝さんはついに握らなかつた。依然としてマスコミは外省人が握っているというのはそうなのですが、それでいいのです。それを超える、いわば李登輝時代の達成がありましたから、これでマスコミまで全部李登輝派にしてしまつたら、それはある意味では独裁になつたかもしれません。

台湾は本当に自由な、いい国になりました。だれが行つても好きになるのです。私も大学なんかでも、中国の大学とも協力協定を結んでいますしあれですけど、みんな台湾に行くと初めて行つた人も含めて、みんな台湾がいい、好きだと言う。実にいい国になつたのです。

台湾問題の核心というのは、そこだと思うのです。建国五十周年の中国が、本当にいい国になつたかどうか。みんなが進んで行きたくなるような国だろうか。あるいはみんなが進んで統一したくなるような国だろうか。台湾の人たちが心から進んで一緒になりたいような国を中国が作らなかつたところに問題があるのであつて、そこが台湾問題の核心なのです。ましてや、その手前にある香港などは、「一国両制」とはいえ、全く約束も違つ

て、香港は全くだめになりました。そういう状況を見てみると、とてもではないけれど中国のシナリオで統一するなんていうことはあり得ない。あつてはならないのです。したがつて私はそういう状況を考えますと、李登輝さんの時代というのは一つのまさに画期的な歴史的意味を持つというふうに見えるわけであります。

さてそこで、そういうときにしかし中国側はいろいろ言うわけですが、去年の七月の例のドイツの放送局とのインタビューにおいて、李登輝さんが台湾と大陸中国の関係を、「特殊な国と国との関係」というふうに言いました。これにすぐ北京側は飛び付いて、二国論という形で批判して今日に至っているわけであります。そのときの経緯を私の知る限り申し上げますと、これについても新華社などは評論員が「人民日報」で、いろいろでたらめなことを言っていました。

ちょうどそのでたらめさというのは、李登輝総統が台湾の大地震で本当に寝食を忘れて救済に飛び回っているときに、「李登輝は台湾地震のことを何もしないで、二国論を振りまいている」なんて北京が書くわけで、これでは全く説得性が

ない。それと同じように、李登輝さんの発言についても、いろいろ中国側は言っているのですが、その中の一つに「Foreign Affairs」なんていう雑誌に論文を出して、ようやくそこに掲載してもらつたなんて言っていますが、「Foreign Affairs」は世界の一番代表的な外交評論誌ですから、他がなくてようやく掲載してもらつたなんて、そんなことはない。北京はこういうデタラメを言っています。だから全然説得性はないのですが、「国と国」発言のときも中国側はいろいろ言っていました。

それから「ドイツ方式を狙つて、ああいうことをドイツの放送局に言つたんだ」。これも全くそうではなくて、たまああの月は意外に外国からのインタビューの申し込みがなくて、ちょうどパッとドイツの人がそこに入ってきて、スケジュール的に合つたということにしか過ぎないのです。ただしお役人が作つたインタビュー応答の草稿を李登輝さんが見て、全部これを改めて自分の言葉にして発言したわけです。それでインタビューに応じたのです。しかもこのときも、いわゆる「特殊な国と国との関係」ということについては、かなりいろいろ今まで

も準備していたわけです。国際法学者とかを集めていろいろ勉強会も開いた。だから、一度ははっきり言っておかなければいけなかった。

なぜかと言うと、あのままひよつとすると、秋に兩岸海峡会議が開かれる可能性があったわけです。一昨年になります、辜振甫さんが上海、北京に行きました。今度汪道涵さんが来るかもしれない。あるいはそういう状況の中で兩岸会談が開かれたときに、そのところを明確にしないで、そのままテーブルに着いて大陸が主人公で、台湾が従僕であるかのような主従関係に持っていかれたら、これまで主権国家として台湾がやってきた民主化もアイデンティティーの深まりも、つまり台湾の経済発展も社会発展も、全部台無しになってしまうのではないか。これはいっぺんきちんと言っておかなければいけない、という強い気持ちが続続にあったわけです。

考えてみると、あらゆる形で台湾は主権国家です。だれが見ても、警察も、軍事も、外交も、貿易も、経済も、政治も、教育も、司法も出入国管理も全部台湾の中華民国政府がやっているわけです。にもかかわらず、あの問題は初めて明確に

されたわけです。しかも従来は台湾省というものがありませんでしたけれども、台湾省が廃止されるという形になって、そして台湾そのものが、イコール台湾になったのです。中華民国はもはや大陸中国も全部含む中華民国で、台湾はその一部ではないわけです。そこまで持つていくこと、そこまではっきり位置づけることが必要だったと思います。ですからこれを李登輝総統は表明されたわけでありまして、これが今後どういうふうに継承されていくかは、陳水扁政権の大きな課題だと思います。

私は先ほど、陳水扁政権でよかったではないかと申し上げました。だけどこれは陳水扁政権が、李登輝さんがあそこまで苦労してやってきた台湾化、民主化を、どういうふうに次のステップを進めていくか。これはまさに陳水扁政権の大きな責任だと思っています。それで周りを気にしたり、何か言えど大陸にやられるからトーンダウンしようというようなことがあつては困ると思うのです。李登輝さんがあそこまでやってきたことを、次のステップとして何をやるか。これを陳水扁政権にぜひ望みたいと思います。一挙にや

るのは難しいかもしれませんが、ちょっとこのところ民進党は独立綱領を持つていただけに、それをあえて隠してみたり、あるいはトーンダウンしてみたり、選挙戦はやむを得なかったかもしれないけれど、それだとすると今度民進党そのものの存在が問われるのではないかと思うのです。まだまだこれからやることはいっぱいあるわけです。

ですから今回私はちよつと事情で出席はいたしません、二十日の就任式に陳水扁弁公室から私がいただいた招待状を見ると、中華民国台湾省と書いてあるのです。このへんはまだ改まつていないのですね。そういうことが、まだいっぱいあるわけです。今それほど台湾のアイデンティティーが強まっても、まだ台湾にはいっぱい「中国」とか「中華」という名前の会社や学校などもありますし、そこをどういうふうに変えていくかは、今後の課題だと思っています。

中国は台湾が簡単に手に入らないことがわかってきて、しきりに「武力解放」をちらつかせています。しかし私は台湾が世界のガラス張りの中で、ここまでやってきた民主化とアイデンティティーの深まり、つまり台湾化というものを中国

の軍事力によって抑え込もうとすることは、国際世論も許さないだろうし、アメリカも黙っていないと思うのです。ましてや、もし仮にプッシェ政権になれば、台湾についてはプッシェ政権のプレーン

は非常によく勉強していますし、これはそう簡単には妥協しない。全世界が見ている前でガラス張りです。選んだ選択を軍事力でということになると、アメリカも決して黙っていないのではないかと。前回の総統選挙のときも、二隻の航空母艦を派遣しましたが、台湾関係法を発動せずにアメリカはそれをやりました。つまりクリントン政権でさえもやったわけです。そういうことを考えますと、ここは台湾の人たちはもうちょっと堂々と胸を張って李登輝路線をさらに発展させてほしいと思います。おずおずと、何かやるとうた中国にやられるのではないかと。台湾の在り方が中華世界全体を変えていくのではないかと私自身は思いますし、それを期待しているのです。

になると思うのです。

軍事力の問題は、もちろんあります。私は軍事専門家ではないのですが、そこ

はきちんとしておかなければいけない、安全保障措置を十分にしておかなければいけないと思いますし、いわゆる周辺事態についても何も日本の外務大臣や首相が、あえて台湾海峡を含むと言う必要はないにしても、そこは日本の防衛のプロは、まさに台湾とも連携を取った上で、きちんとしておかなければいけないと思うのです。

中国は、とにかくこのところGNPの

国防費二ケタ、多いときには二・四%

とか、昨年も一五%とか増強しています。

いま世界の中で中国を攻めようとする国はありますか。ないでしょう。それなのに、何で中国は軍事力を増強するのでしょうか。台湾が防衛的に軍事力を増強するのは理由があります。中国が軍事力を使うと言っているわけですから、これはきちんと防衛措置を取らざるを得ない。

ですから戦略ミサイル防衛構想(TMD)なんかにしても、きちんとしておかなければいけないと思うのですが、本当に日本もロシアもアメリカも中国を攻めようなんて思っているところはないわけ

です。ましてや民主化された台湾が先制的に中国を攻めるなどということはありえない。それなのにやはり軍事力を増強しているわけです。ここに大きな問題があります。日本で最近ようやくODAに

についても見直し論が進んできたのは、当然だと思っています。ODA四原則、皆さんちよつと見ていただくとわかりますが、明らかにそれに違反していても日本は、日中友好外交のために中国に支援してきたことは大きな誤りでありまう。つまり中国の脅威を助長するような形の日中外交ということになってしまっています。

ですからそこは私はアメリカ、日本、そして台湾が自由陣営の一環として、民主陣営の一環として、きちんとして措置をしていかないと。中国の危険な出方に対しては、それを封じ込めておく体制が絶対必要だと思っています。封じ込めというのは、ジョージ・ケナンが最初に使った言葉でありまして、決して何でも軍事的に出るということではないのです。そのためにいかに周辺がきちんとした健全な措置を取っておくかということであって、まさにこのへんの問題は、これからのアジアにとっても非常に重要なところではないか。

このようなことを考えますと、台湾の李登輝時代というものは一つの本当に歴史的な役割を果たしたと思います。そしてそれは同時に日本にとつての台湾というものが、いかに重要な存在であるか。台湾海峡が日本の安全保障にとつてもいかに重要な存在であるかが今のような中国の政策を見ている限りはつきりとすると思うのです。

そこで最後にどうか、皆さんに願いたいことは、今後の日台関係はどういうふうに作っていくかということです。私自身は、「アジア・オープン・フォーラム」を財界代表の亀井正夫（住友電工相談役）さんなどとともに十二年間主宰させていただきました。これは主として学者、評論家、財界人の民間の知的交流会議でありましたが、今後はさらにいろいろなチャネルで日台関係を発展していただきたいと思います。このマスコミ総合研究所の役割も大きいと思いますし、さまざまな日台、日華関係のチャネルが現にあります。

できれば私からすると、「日華」という言葉をもうやめて、「日台」に統一していただくほうがいいのではないかと。今

の日華議連、あれももうそろそろ「日台」にしたほうがいいのではないかと思います。それは民進党でも中華民国はまだ中華民国ですけれども、本当はそこも改めていく時代になりつつあるのではないかと。やはりチャネルは、いろいろ多元的なチャネルがあつていいと思うのです。いま日本と台湾は、観光客だけでも百万近い人たちが日本に来ていますし、貿易も非常に台湾の赤字ですけれども大きな額になっていきますし、そういうことになる

と経済界、あるいは学界、それから民間、それからさっきの政治家、いろいろなチャネルの交流を深めていただきたいと思います。

幸いにして最近の台湾では、再び日本語教育がかなりやられてきておりまして、ご承知のようにいま六十歳前後から上の人は、日本語の世代ですけれども、そこからパツと断絶します。そして戦後の空白があつて、そしてやがて日台断交もあつたものだから、何とか若い人たちが日本文化なり日本語教育を進めるようにしていかねばいけない。

その一環として私も東京外国語大学は、国立大学としては初めてですが、私が学長に就任した後、一年ぐらい経ちま

したが、一九九六年に台湾の国立政治大学と交流協定を結びました。そして昨年の十二月に国立台湾大学とも交流協定を結びました。協定という言葉だけは避けてほしいという外務省の指導があつて、「覚書」としましたけれども中身は全く変わりません。しかも授業料の相互免除までやりましたから、これは大変タフな折衝が必要で、授業料は国庫金になりま

すから、国庫金の収納に関して免除するということは国家という問題がそこに出てくるというので、これも難しかったのですが、学問の世界に国家の壁はあつてはいけないというプリンシプルを掲げまして、文部省、大蔵省、外務省を説得し、現在は一切壁がなくなり交流が進んでおります。

私どもの日本語教育の先生方も、台湾へ行くと本当に台湾はいい、台湾の日本語教育は非常に裾野が広がりつつある、と言っています。でもまだまだ不十分ですから、それぞれの大学関係者は、大いにそういう点でも努力していただきたいと思ひます。これもやればできることなのです。

ですから、先程ご紹介した霍見氏の「朝日新聞」の素晴らしいコラムにも、

日本の国立大学教授は台湾を訪問できないという誤解がありました。全くそうではありません。今は研修旅行で、台湾、つまり公的な旅行でも台湾を国立大学の教官が訪れることができますし、私は最近いちいち面倒臭いから取りませんけれども、台湾国立政治大学の記念式典がありまして、公用旅券で行きました。国立大学の学長というのは指定職の国家公務員ですけれども、公用旅券で行きました。ですから基本的にはもう制約がなくなっています。

ただそれは非常に細かいところまで事務的に詰めて、五十数項目ぐらい全部チェックしてクリアして、文部省、外務省の次官レベルまで通らないと、これは実現できなかった。でもやろうと思えば、できるのです。ですからいろいろなレベルで、皆さまにも努力していただいて、まだ改善しなければいけないことがあろうかと思っています。

それらのことをいろいろなチャネルで今後進めていくことが、ますます必要でありますし、一方台湾の若い世代の人たちは日本ファンが多い。いわゆる「哈日族」(ハールーツー)という日本好きの人たちもいますから、そういうところに

希望が持てるのではないか。

一方日本の、少なくとも私はいま学長ですので授業を持つておりませんが、ゼミナールその他では中国問題というのと、台湾問題を専攻する若い学生たちが非常に増えてきています。つまりそれだけ台湾が研究の対象、関心の対象として高まっているということでもあります。そういうことも含めて、大いに今後の日台関係を増進していただきたいということを最後に申し上げまして、今日のお話を一応閉じたいと思います。どうもありがとうございます。(拍手)。

Q & A

倉田理事長 どうもありがとうございます。今日は李登輝總統の功績そのものを、四つの領域に分けてご説明をそれぞれいただいたわけでございます。

本日は政・財界、教育界の代表的な方が、お見えでございます。僭越でございますけれども、私のほうからライフの会長でいらっしゃる清水さんをご指名させていただきます。経済人を代表してお言葉を頂戴できればと思います。いかがで

ございましたか。

清水 ご指名いただいた清水でございます。先ほどから中嶋先生のお話を承っております。大変感無量な点がたくさんあります。実は李登輝さんを日本へお招きしようと思つて、私はその運動の先頭に立ちまして、村山内閣のときですが、政治家約百名と経済人、あるいは学界の先生方、あるいは一般の方から二千人のご賛同を得て、それを持つて首相官邸へ行きました。村山富市首相に李登輝さんを日本へ招きたい。理由はかくかくしかじか、政府は協力しろということを入れられましたら、翌日警察庁の外事課の課長と担当官が飛んできて説明をしてくれというので、懇々と説明をしました。帰りには非常に感動して官職にある者として申しづらいけれども、ご意思はよくわかりましたということで帰りました。しかし実現は、なかなかしなかった。

いよいよ李登輝總統がその職務を終えられて、自由の身というか民間人になられますが、李登輝さんを日本に招かれる運動かなんかをされるようなことを読みましたが、その点、どういうふうにすれば実現可能か。私も李登輝總統とは何回



清水信二氏

もお目にかかり、先ほどの連戦さん、宋楚瑜さんなんかもよく存じておりますが、本当に日本の今の政治とか行政と台湾の政治行政を見ますと、ちょっと残念ながら日本側に見劣りするようなこともいろいろ見られます。私は日本と台湾と韓国と手を組んでアジアというものをガッチリ固めたいといけないと考えています。

特に二〇〇〇年問題というのはこの間あったのですが、あれで日本の全国の金融機関が使ったお金が四千七百五十億円、それで何も起こらなかった。私の会社も二億ほど使った。それから日本全国であ

の二〇〇〇年問題で大騒ぎして使ったお金は、二兆九千億だそうです。これもドブに捨てたようなものだ。みなアメリカからの、あれを私どもが調べたら、IBMの二十五年前の教科書に、九九九の次は〇になって白紙になるという一項目がある。それを利して、あの騒ぎをやったということですよ。よほどこれからのことを考えると、日本もしっかりしなければいけないが、われわれが安心して手を組める相手というと、今のところ日本と韓国と台湾しかないかなという気がいたしております。

中嶋 最初の李登輝總統の来日の問題

なのですが、私どもの「アジア・オープン・フォーラム」では倉田先生もそこにいらつしやったのですが、去年の總統府の会見のときもそうなのですが、李登輝さんとしては「アジア・オープン・フォーラム」に出席して、台湾の民主化の経験とか、言ってみれば学問的な問題とか哲学とか、を話したいと表明されていました。「アジア・オープン・フォーラム」はそういう場としては非常にふさわしいのではないかと思っております。總統自身もその強い意向を持っているのですが、私自身はそう簡単だとは思ってはいません。ただ状況がかなり変わりましたので、今後いろいろ考えて努力していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

倉田理事長 塩川正十郎先生、一言頂戴いたしたいと思います。

塩川 先生、ごぶさたしております。遅れてまいりまして、中嶋先生のお話を途中から承ったようなことでございますが、私も清水さんと同じように李登輝総

統をぜひ日本にという希望を強く持つている者でございます。昨年も台湾に行きましたとき、そのことを申し上げたこともございました。

国際情勢がこういうことでございますから、国と国との間でそういうことはなかなか難しいこともわかつてはおりますが、しかし李登輝総統が一民間人となられたならば、政治的な問題を抜きにして交流をしていただくことを、私たちは働き掛けていくべきではないかと思ったりしております。いずれはそういう時期が来るであろうとは思ったりもして期待を持っているわけです。

ところが国際情勢から見まして、私はだんだんと変化してきている。一つは北鮮が南と話し合いをしようということも始まってきて、実際どれだけのことを期待できるかわかりません。しかしまた一方におきまして、中国もあまり立てこもったことをやっけていても、内部の情報がだんだんと外国からの刺激があつて変わってくるのではないか。一つは情報のグローバル化と言いましようか、そういうものが今や、ものすごい勢いで世界中やっておりますので、そのことが世界の政治を変えていくという感じが

たしております。

一つは通信、そして放送、一つはインターネット、こういうものがインターネットを抜きにして自国の経済だけ守ろうといったって、守り切れるものではございません。どうしてもこのネットワークの中に入らざるを得なくなつてまいりました。そのことが世界を変えてくるように思っております。

私はそういう時期を日本が積極的に準備してくるのが、むしろ日本の役割ではないかと思ったりもしております。先生からいろいろと普段教えていただいて

いることでございますので、先生もそういう面についての将来の見通し、つまり日中韓、この関係等のこれからの推移というものにつきまして、何かご示唆がありましたらお聞かせいただきたいと思います。ありがとうございます。

中嶋 どうもありがとうございます。やはり日中韓という場合に、中国と日本がシステムが違いますから、いかに中国をそういう場に引き出すかというか、中国がそういう場になじむような形にするかということは、一番大きな課題だと思います。



塩川正十郎氏

います。それはそう簡単なことではないと思います。

その場合に、台湾がどういう形でそこにコミットしていくかということも、そう簡単なことではないと思います。ただ中国の側もいま塩川先生がおっしゃったように、何かを求めている。今のような強硬姿勢で台湾についても、「武力解放」ということだけ言っていられない、そういう状況が出てきていると思います。そこは日本の外交としても、本当に考えていく、知恵を絞っていかなければいけないと思います。

ただ、とかく日本の外交は、これまで中国の言われるままに頭を下げるというようなある種の贖罪外交みたいなことをやってきていますから、それではとても知恵が絞れない。そこから解放されていくことが必要だと思っていますので、ぜひ塩川先生にもまたいろいろ大いにご活躍いただいて、このアジアの一つの大きなキーパーソンにぜひなっていただきたいということを私からも期待させていただいておりますので、よろしくお願いいたします。

倉田理事長 まだまだお話し、あるいはご質問をいただきたい方がございましたが、ちょうど時間になりましたので、これをもって終わらせていただきたいと思います。

たまたま今それぞれのご質問の中でもございましたように、情報化の進む中で、独裁というものはどのような方向に行くのだろうかということにつきまして、六月十五日、同じこの会場に長谷川慶太郎氏を迎えて、「情報化社会と独裁」ということで講演をお願いしてございます。まさに今日のお話の延長になろうかと思っておりますので、奮ってご参加いただきたいと思います。中嶋先生、どうもありがとうございます。

中嶋 どうもありがとうございました（拍手）。



倉田理事長